ネギ小菌核腐敗病

1　病原菌の特徴

ネギ小菌核腐敗病は、糸状菌（カビ）が原因で起こる病気で、埼玉県内では平成6年と16年に多発生し、大きな被害が認められました。

病原菌は、被害部に黒色で不正形のやや扁平な菌核を形成し、これが土壌中に残って、次作の伝染源になります。菌核は、直接発芽してネギの葉鞘に侵入したり、菌核や病斑部分に胞子を形成して、これが飛散して周辺の株に伝染します。

2　被害の様子

本病は主に土寄せ後に発生します。はじめ土寄せされた葉鞘の軟白部に淡い褐色の斑点ができ、それが拡大して水浸状に腐敗します。腐敗した部位には、黒い菌核が多数形成されます。さらに腐敗が進行すると病斑部分の表面が裂け、中の葉が突出することもあります。また、本病は苗床でも発生し、苗床では苗が腐敗・枯死します。

写真1　苗床における苗の腐敗・枯死症状

写真2　胴割れ症状を呈した葉鞘

写真3　症状の進んだ被害株

写真4　病斑上に形成された菌核

3 発生について

（1） 発生条件

夏から秋にかけて冷涼・多雨であると、晩秋から早春にかけて多発します。また、土壌水分が高いと発生が多くなります。病原菌は 5～30℃の範囲で生育し、発病の適温は 5～15℃です。

（2） 発生消長

本病は、2～3月に収穫する秋冬ネギで被害が大きくなりますが、5～6月に苗で発生することもあります。また、発生の年次変動は非常に大きい傾向があります。

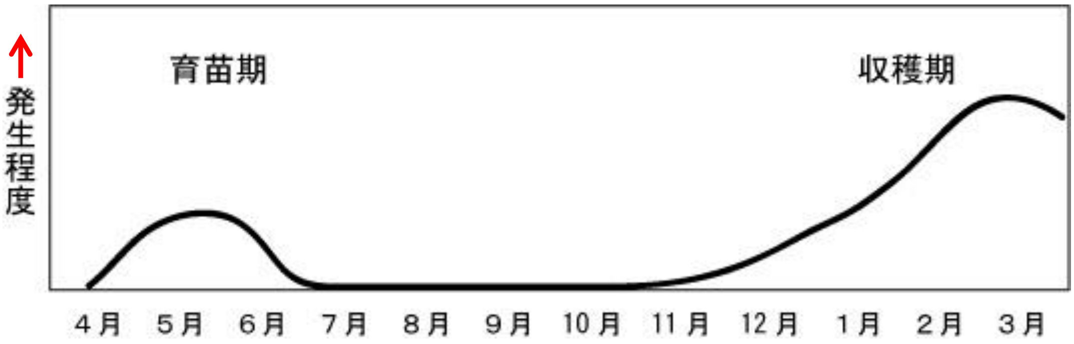

図1 秋冬ネギにおける発生消長

4 防除時期と防除方法

（1） 発生ほ場では連作を避けるほか、排水の悪いほ場では、排水対策を実施しましょう。

（2） 定植時に苗の選別を行い、老化苗や枯れ葉の多いものは定植しないようにしましょう。

（3） 早期発見につとめ、発病が確認されたほ場では、早期に収穫をしましょう。

（4） 発病株及び被害残さは次作以降の伝染源となるため、ほ場やその周囲に放置せず、適切に処分しましょう。

（5） 本病は発病初期の確認が難しいため、 過去に発病が認められたほ場や発生が予想される気象条件の場合は、土壌消毒に加え、薬剤による予防防除を行いましょう。

薬剤防除を実施する場合は、

○ 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。

○ 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。

○ 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発　行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先（原稿執筆）

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

©埼玉県 2005

彩の国埼玉県